

## エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

### 第十八回 改革王、カブース国王

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

#### 18-1. オマーンが見えてくる - 日本にもっとも近いアラブの国

1995年に「オマーンが見えてくる」を出版した後、私には多くの講演依頼が入るようになった。出版直後の中東研究者が主催するイスラーム研究会や翌年初めの大手保険会社以来、小学校、中学校、高校、大学などの学校関係、会社や官庁、ロータリークラブ、旅行会社、NPO、高校や大学の同窓会などで、数十回の講演を依頼された。私の講演歴には、既述の海外の大学での講演や記念講演も加わった。

演題は、「中東というところ」、「日本・アラビア交流史」、「中東を歩いて〇〇年」などが多いが、一番多かったのは、「オマーンが見えてくる－日本にもっとも近いアラブの国」であった。

オマーンが地理的にもっとも日本に近いアラブの国であることは明らかであり、歴史的にも日本とは深い関係にある。また国民性や慣習などの面から見ても、「日本にもっとも近いアラブの国」と言ってよいであろう。

私がいまも交流を続けているオマーンをより理解していただきたく、そのときの講演から抜粋し、内容をアップデートしたものをここに載せる。

##### (1) オマーンの基本情報

オマーンの国土面積は、300,095平方キロで日本の約80%。日本全体の面積から北海道を除いたものより、少し大きいくらいである。

国土は、砂漠が82%、山地が15%、平地が3%。海岸線が3,165キロメートルあり、その地形は多様性に富んでいる。3,000メートルを超える山がある一方で、ムサンダム地方(ホルムズ海峡に面したオマーンの飛び地)には、フィヨルドの地形が広がっている。南部のドファール地方は、モンスーンの影響を受ける6月から9月には毎日雨が降り、緑の景色が一面に広がる。

気候は、一年の半分は地獄(夏シーズン、とくに5月から8月)、半分は天国(とくに、12月から2月)と表現できる。首都マスカットの場合、夏シーズンには最高気温が45℃まで上がり、最低気温でも30℃近くある。一方、12月から2月は最高気温が27℃前後、最低気温が14℃と、日本の秋のような日が続く。ドファール地方はモンスーンの影響を受けているため、年間平均気温は、マスカットよりも比較的低い。降水量が少ないオマーンではあるが、ときとして大雨が降り、街に水が溢れるというような状況になることもある。

人口は527万人（2024年末）で、北海道のそれとほぼ同じ。近隣の湾岸諸国と比べると、外国人の割合が43%と最も低いのが特徴と言えよう。

宗教は、イスラーム教が全人口の95%を占めている。スンニ派やシーア派とは異なる、穏健で知られるイバード派が主流である。同派の特徴は寛容を旨とし、指導者を選挙で選ぶところにある。

政体は、君主制で元首は50年近くに亘って、オマーンの近代化をすすめてきたカブース国王の後を継いだハイサム・ビン・ターリク・アル・サイド国王。憲法にあたる国家基本法が定められていて、立法権を持つ二院制の議会があるのが特徴である（湾岸諸国で同様の議会が存在する国は、バーレーンのみ）。

名目GDPは、1,113億600万ドルで世界第70位（2025 IMF）。一人当たりでは20,230ドルで世界60位だが、人口の約半数弱が主に低賃金労働に従事する外国人であることを考えると、37位の日本の35,611ドルと比べてもオマーン人の所得水準は遜色ないものと言えるだろう。

## （2）オマーンの10大特徴

### ・平和な国

オマーンの外交方針は、平和的共存、善隣、内政不干渉、相互の主権尊重が原則である。紛争は平和的手段で解決するための努力を惜しまない。どの国とも良好な関係を保ち、国家間の紛争の仲介の役割を多く果たしている。国内の治安も良く、女性の夜の歩みに何の不安もない。

### ・きれいな国

オマーンの玄関口であるマスカット国際空港に着いて、驚くのは街のきれいさである。整備されたロータリーや手入れの行き届いた花壇もさることながら、なによりも主要道路沿いにはゴミが落ちていない。

### ・国民の人柄がよい国

オマーン人は温和でやさしく、親切であり、シャイで遠慮深く、他人への気遣いが細やかである。日本人によく似た国民性である。オマーン人の人柄の良さが、オマーンの最大の長である。

### ・インターナショナルな国

オマーンでは英語がよく通じる。都市部ではアラビア語は必要ない。オマーンはかつてアフリカのザンジバルと現パキスタンのグワダル地方を領有し、19世紀には英国とインド洋の覇権を争い、1840年にアラブ諸国で初めて使節を米国に送った国である。国際感覚も優れている。

### ・親日的な国

オマーン人の対日感情は極めてよい。タイムール国王の神戸在住やブサイナ王女とのつながりもあるが、日本人の人柄の良さや日本の工業製品の優秀さが最大の理由であろう。

日露戦争での日本の勝利、太平洋戦争での米国に挑んだ勇敢さへの敬意、原爆被害に対す

る同情、戦後の目覚しい経済発展への憧れなども奥底にある。

#### ・景色の良い国

オマーンには高い山と長い海岸線があり、湾岸諸国の中では群を抜いて多様性に富んでいる。急峻な岩山が海から切り立つムサンダム地方はフィヨルドそっくりの景観から「中東のノルウェー」と呼ばれる。南部のドファール地方は、雨季の6月から9月には山は全山が緑となり、「湾岸のスイス」とも称される。

#### ・歴史のある国

オマーンは、紀元前3000年ごろに栄えたシュメールでは「マガン (Magan)」の名前で知られていた。紀元前2300年前の石版に「アッカドのサルゴン王がディルムン (Dilmun、現在のバーレーン) とマガンからの船がいつも接岸していることを誇った」との記録がある。

ギリシャ・ローマ時代にオマーンは、乳香で栄え、「幸福のアラビア」として知られた。5世紀にはすでに中国と交易があった。1744年に創設された現ブーサイド朝は、現存するアラビアの王朝の中で最古である。

#### ・香水と花を愛する国

乳香の産地であるオマーンでは香りは生活には切り離せない。家々では毎朝香を焚き、服に香を焚き込め、男女を問わず香水を使っている。

オマーン人男性が着用するデスダーシャの右胸部分に香水を染み込ませるための房がついている。世界一高価な香水であるムアージュはオマーンで製造されている。

ジャバル・アフダルの山中にはバラが自生し、季節になると馥郁たる香りを漂わせる。

#### ・女性が活躍している国

私がオマーンを最初に訪れた1974年に、オマーン人女性が湾岸諸国とは違って顔も隠さずに海岸でかいがいしく働く姿を見て驚いた。オマーンで女性警察官の登場が1972年というから、当たり前前の光景であったかもしれない。オマーンでは女性の社会的進出が目覚しい。

#### ・環境と文化遺産の保護に熱心な国

オマーン初の環境関連法は1974年に制定され、環境官庁の設置も湾岸諸国ではオマーンが最初である。オリックスやアオウミガメの保護は有名である。(アオウミガメの産卵を見学した話については、第八回を参照)

文化遺産の保存については、1976年に設置された文化遺産省の下で古文書の収集、博物館の整備、城砦の修復などが進められている。

#### (3) オマーンと呼ばれ方

オマーンと呼ばれ方では、「シンドバッドの国」がもっともよく知られているかもしれない。これは、アラビアンナイトに登場するシンドバッドの出身地がオマーンのソハールだったことに由来する。

その他、上述した「中東のノルウェー」、「湾岸のスイス」以外にもいろいろある。前項

のオマーンの10大特徴のうちから、さまざまな要素が組み合わさって、そのような呼称が生まれたと考えられる。

以下に、駐在した日本大使から聞いたものも含めて列挙するので、オマーンのどの特徴を含んでいるのかを想像しながら、目を通していただきたい。

- ・ホルムズ海峡の南
- ・中東のオアシス
- ・紳士の国
- ・中東の良心
- ・中東のスイス
- ・湾岸の宝石

## 18-2. マレーシアでの国際シンポジウム - 日本とオマーンの交流の歴史を語る

2016年6月下旬に、オマーン大使から「大使館へ来て欲しい」との連絡があつて、大使館に行くと、「10月にマレーシアで国際シンポジウムがある。タイトルは、『東南アジア、中国とオマーンとの関係』。このシンポジウムに出てくれないか」という打診であつた。「行ってもいいが、タイトルに『日本』も加えてもらいたい」と要望した。「タイトルについては、私から申し入れをする。東大の辻上准教授にも参加を頼んである。日本からの参加は2人」ということであつた。

辻上准教授とは、私の演題を「日本とオマーンの交流の歴史」、准教授の演題を「オマーンと日本：現在と将来」とすることで調整し、私は期日までに事務局に作成した10,300語を超す英文の原稿を送った。しかし、9月になって、発表者の講演時間は10分間と判明したので、急遽1,200語の原稿に書き換えることとなった。

かくして、私は、10月5日と6日にマレーシア国際イスラーム大学主催の「オマーンと東南アジア、中国と日本：文化、歴史、政治と文明の展望」という国際シンポジウムに参加した。

スケジュールは、第1日目が9時から16時20分まで午前中に開会式とメイン会議、午後に文明と歴史的側面。2日目が午前中に宗教、言語学的、通商的側面、午後に文化、知識交流側面についての会議であつた。

主催者のマレーシア国際イスラーム大学とスポンサーのオマーン寄進・宗教省の代表者が開会の辞を述べて会議は始まった。

その日スピーカーとして登壇したのは、オマーン、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、中国、台湾、日本からの34名。中国からは北京大学の教授が2名参加していた。辻上准教授は、初日のメイン会議の6人の登壇者のうちの2番目に、私は5番に登壇した。出席者は約100名。

講演では、「日本とオマーンの交流の歴史」をヒト、モノ、文化の3つの観点から10分

間で手短かに話をしたのだが、ここでは、それぞれについて、新たに加筆して紹介したい。

## 1. ヒトの交流

### (1) ペトロ岐部

江戸幕府（1603－1868年）は、1613年にキリスト教を禁止し、翌年には宣教師、修道士、日本人キリシタンをマニラとマカオに追放した。

マカオに追放された中にペトロ岐部がいた。彼は、幼少の頃からの夢であったローマで司祭になるためにゴアを出発して、マスカット行きの船の下級水夫となってゴアからマスカットに着いたと言われている。1619年の秋から暮れのことだった。

なお、ペトロ岐部は1630年に布教のために決死の覚悟で帰国し、39年に捕らえられ殉死している。享年52。2008年にキリスト教徒の「福者」に列せられた。

### (2) 古川宣誉

明治政府によってペルシャとトルコに派遣された吉田正春使節団副団長の陸軍工兵大尉古川宣誉が、1880（明治13）年6月25日にマスカットに到着した。後述する志賀のように国王に謁見したわけではなく、市内を数時間観光しただけではあったが、記録上初めてオマーンを訪問した日本人は古川であることを、本エッセイでは何度も触れてきたが、改めて指摘したい。

古川は、旧幕臣で戊辰戦争に参戦。市川・船橋の戦いでは、後に数々の教育機関を立ち上げ、麻布学園の創設者でもある江原素六が官軍兵に組み敷かれ「あわや」の時に命を救っている。沼津兵学校で学んだ後、陸軍に入り、ペルシャ派遣後、日清・日露戦争に従軍し、中将で現役を退いている。なお、ペルシャで吉田とともに叙勲されたことを付言しておく。

### (3) 比叡艦と伊東祐亨

上述の古川が品川で乗船したのが、イギリスから日本政府が購入した当時最新鋭の軍艦だった比叡艦である。古川はムンバイで下艦し、民間の船でマスカットとペルシャへ向かったのだが、この比叡艦は、古川がマスカットを出発してからおよそ一週間後の1880（明治13）年7月3日に、マスカット港に入港した。同艦が、オマーンを訪れた最初の日本の船であることも改めて指摘しておく。

翌朝、比叡艦が国王に対して21発の礼砲を放ち、すぐに陸地にある砲台から同数の答砲があった。礼砲とは、通常、国交のある国の国家元首、領事、将官などに対して行うものなので、この礼砲のやりとりをもってして、日オ関係の嚆矢と見てもよいだろう。両国が正式に国交を結んだ1972年より90年以上前のことであった。

同日に、比叡艦艦長の伊東祐亨中佐を始めとする士官12名が王宮で国王に拝謁した。詳細は、第十六回と第十七回をご覧ください。ここでは、彼らが志賀よりも40年以上前に、王宮で国王に謁見した最初の日本人であったことを強調しておきたい。

### (4) 志賀重昂

日本とオマーンが深い絆を結ぶきっかけとして特筆すべきは、地理学者で思想家、衆議院議員も勤めた志賀重昂のマスカット訪問である。

石油確保と東西対決などへの対応策をさぐるべく出発した3回目の世界周遊の途次の1924年2月28日に、インドからマスカットに到着した志賀は王宮に向かった。王宮に辿り着くと、志賀は門番に、「自分は遠く日本からきた。オマーンと日本との友好関係の促進について支持を得たく、国王に拝謁したい」と伝えた。

タイムール・ビン・ファイサル国王はこれを受け入れ、志賀との謁見で「よく来られた。貴殿はアラビアも日本も同じアジアとは考えないか。ヨーロッパはヨーロッパのことを扱ってればよい。アジアのことはわれわれが処すればよい。日本はどのようにしてアラビアにやってこないのか。商売をし工業を興すためにアラビアに来ることで、親交を促進しアラビアを改善、復興することができればお互いによいではないか」と話された。

感極まった志賀は国王に「それこそが私が申し上げようと思っていたことです。言われたことを全力で日本の人びとも伝えます」と誓ったのであった。

#### (5) タイムール・ビン・スルタン・アル・サイード国王

1932年に退位したスルタン・タイムールは志賀との王宮での出会いに触発されて、1935(昭和10)年3月に世界漫遊の船旅の途中に神戸に立ち寄り、日本女性の大山清子と知り合った。翌年、再来日したタイムールは、日本での永住を決意して大山と結婚し、神戸に住んだ。1937(昭和12)年10月10日に二人の間にブサイナ王女が誕生した。

同年12月には、実子のサイード国王とその弟のターリック殿下が父を訪ねるべく来日した。その後清子が結核に罹ってしまい、1939(昭和14)年11月に清子は23歳の若さで亡くなる。タイムールは兵庫県加古郡稲美町に清子の墓を建てた後、3歳になっていたブサイナを連れて日本を去った。その後、彼女はオマーン王室の王女として育てられた。

なお、王女は現在もご健在と仄聞する。2019年に私がオマーンを訪れた際に、同行した小原が王女から書簡をいただいた話は、第十七回を参照願いたい。

## 2. モノの交流

近代以降、日本の商船がペルシャ湾に入るようになったのは昭和に入ってからである。それまでは、明治時代から日本と交易のあったインド経由で日本の雑貨類などがオマーンをはじめとする中東諸国に届いていたとは推測できるが、公式の記録は見当たらなかった。

しかし、この状況は第一次大戦(1914-18)を境に一変する。ヨーロッパ諸国が激しい戦争で輸出どころでなくなり、中東の国々は物品の輸入先をヨーロッパから日本に切り替えたからである。

1930年代には、湾岸諸国では日本が1位か2位の輸入相手先になった。オマーンにおいても、1933-34年度の国別輸入額はインドに次いで日本が第2位になっている。日本の躍進を担ったのは綿布であり、同年度にオマーンは、インドからの輸入額の3倍ほどの綿布を日本から買い入れている。日常的な衣類のほとんどが日本製品となるほどであった。

もう一つだけ、モノの交流で触れておきたいのが、真珠についてである。

湾岸諸国とオマーン沿岸で採れた天然の真珠は、マスカットに集積されてから東西に輸出されていて、莫大な輸出額を誇った往時の主要産品であった。しかし、1893年に御木

本幸吉が生産に成功した養殖真珠が戦後の1950年代にその量産が可能になったことから、壊滅的な打撃を受けることとなった。隆盛を極めた真珠産業の面影は、現在でもオマーンや湾岸諸国産の真珠が現地でかすかに売られていることから偲ぶことができる。

### 3. 文化交流

#### (1) 乳香

乳香を通じたオマーンとの交流は第十二回と第十三回で詳述したが、ここでは、これまでに触れる機会がなかった、反魂丹と乳香散について簡単に述べる。

奈良時代(710-784)に、中国・朝鮮を通じてもたらされたと考えられている乳香は、おもに貴族の間で香料として用いられていた。その後、室町時代には、中国から伝わった製法によって薬にも使われるようになったようである。

江戸時代には、江戸城中である大名が急病で倒れ瀕死の状態に陥った際に、居合わせた富山藩主が持参していた反魂丹を与えたところ、たちどころに回復したという逸話が残っている。これを見ていた諸大名がこの薬の自国での販売を希望し、富山の薬売りによって全国に流通するようになった。

反魂丹の文字通りの意味は、「死者を蘇らせる(反魂=魂をこの世に戻す)薬(丹)」であり、当時は乳香が使われていたと伝わる。反魂丹は、現在も胃腸薬として販売されているが、成分に乳香が含まれていないことを付記しておく。

もう一つ、乳香散は、江戸時代の口中医師(現代の歯科医師にあたる)だった兼康祐悦が発売した歯磨き粉である。製法は残っていないが、名前から見て乳香が用いられていたと言っていて間違いないだろう。

乳香散が大人気となり栄えた「かねやす」は、幕末、第二次世界大戦の空襲を経験した移り変わりの激しい東京において、「かねやすビル」として、本郷に現存する。

#### (2) 日本オマーンクラブ

辻上准教授の提案で、私は急遽日本オマーンクラブのことも紹介した。

会員資格が「オマーン好きであることのみ」、「官や大会社とは関係のない草の根団体であること」、「会員が200人いる」ことなどを説明した。これについては、後日知り合った北京大学の中国人学者から、「日本オマーンクラブ会員のオマーン愛こそが本物」と褒めてもらった。

2日目は、午後1時半に終了した。その日の4時に、オマーン寄進・宗教省とマレーシア国際イスラーム大学の代表者、中国からの2名、ブルネイと台湾からの各1名、それに日本からの私と辻上准教授が駐マレーシア・オマーン大使館に招待された。行ってみると、大使不在でわれわれをもてなしてくれたのはマッキー公使。同公使はかつて駐日本オマーン大使館公使でその後韓国公使を務めて、その時はマレーシア大使館に転任していた。

私は、奇遇に驚いた。大使館では、出席者に茶菓がふるまわれ、乳香を用いた高価な香水「ムアージュ」もいただいた。

中国の学者からは、「同僚の学者が『日本とオマーン関係』の本を探している。適当な本はないか」との問い合わせがあったので、「英文で出版された私の本が世界で唯一の参考書籍だろう。私のHPに入っているから、そのURLを教える」と答え、後日メールをした。私の本が中国研究者の役にも立ったのはうれしいことであった。

### 18-3. 改革者、カブース国王 - オマーンの近代化に尽くす

カブース国王即位40周年に当たる2010年の12月、オマーン遺産文化省が在東京オマーン大使館と共催で東京で「オマーン・カルチャー・ウィーク・イン・東京 2010」を開催した。この一環として、同21日に国連大学で「21世紀のオマーンと日本」というシンポジウムが行われた。

それに先立つ11月のことだった。オマーン大使から「大使館へ来るように」との連絡があって、大使館に伺うと「来月、オマーン・カルチャー・ウィークのシンポジウムに参加して欲しい」との依頼を受けた。「パネリストとして、日本からは山内昌之東大教授、脇祐三日経新聞論説副委員長とプロフェッサー（当時の大使の私の呼称）、オマーンからスルタン・カブース大学教授2名が参加する。都合はどうか」と聞かれた。こんな高名な方々と私が一緒によいのかと面映ゆかったが、私はこれを受諾した。

なお、スルタン・カブース大学からの1名は、私がエクセター大学で一緒だったムカッダム博士。もう一名は、オマーン人の著名な作家（後にイギリスの国際ブッカー賞とフランスのアラブ文学賞を受賞）で、文学部教授のジョーハ・アルハルシー女史。

私の演題は、私が翻訳して出版した本の題名から、「改革者：カブース国王」とした。以下に、講演の全文を掲げる。これによりカブース国王の人となりをもより深く知っていただければ幸甚である。

「ご紹介に預かりました遠藤晴男でございます。

いま山内先生から、『東京大学でのスルタン・カブース寄付講座』のお話がございましたが、今年はカブース国王即位40周年にあたり、オマーンでは首都マスカットだけではなく、地方の各地でもさまざまな祝賀行事が行われています。

国王が即位されてからの時代は『オマーン・ルネサンス』と呼ばれていますが、これを主導してきたカブース国王は名君として、国民の敬愛を一身に集めています。

本日私は、国王の生い立ち、その治世、成功に導いた原動力、政治的な叡智、先見性や鋭い洞察力の源、『ミート・ザ・ピープル』というユニークな国内巡幸、今後のオマーンへの国王の思い等について述べてみたいと思います。

カブース国王は、260年以上に亘ってオマーンを統治しているブーサイド朝の王家であるサイド家の嫡男として、1940年11月18日に南部の町サララで生まれました。父は、前国王のサイド・ビン・タイムール。母はオマーン南部のドファール地方の有力部族の族長の娘であるミズーン・ビント・アハマド・アル・マーシャニです。



幼少のころは保守的な宗教的環境の中で育てられ、基礎教育をサララで唯一の教育機関であったサイーディーヤ学校のオマーン人教師のもと、フスン王宮で受けました。利発で、好奇心旺盛で、物事を完璧に行う性向のある少年だったといわれています。

16歳の時に父によってイギリスに送られ、ロンドンの東北に位置するサフォーク州のベリー・セント・エドマンズの私立学校で学びました。初めて訪れたロンドンやエドマンズに行く途中で見たものは、当時のオマーンとは全く違う景色で、電信柱ですら、驚きであったといえます。

国王はここで4年間英語を学び、西洋の知識や文化を身につけました。この期間に国王が興味を持ったのはカメラと、その後生涯の友となった西洋音楽だったといえます。

1960年秋には、ロンドンの西50キロにあるサンドハースト陸軍士官学校に入学しました。この学校は世界でもっとも有名な士官学校の一つで、アラブの君主たちも息子たちを好んで入っていました。

この学校は、出身の社会階層によって学生を区別したりはしませんでした。王位継承者たりとて特別扱いはされずに分け隔てのない厳しい訓練を受け、部屋の掃除や軍服の洗濯まで課せられ、子供の時から慣れ親しんできた敬意と特権は忘れさせられて、服従を学び、上官・先輩の叱責や罵詈雑言によって、不屈の精神、規律、正確さ、平常心、決断力が涵養されたといえます。

サンドハーストを卒業後、ドイツ北西部の町ミンデン近郊に駐留していたスコットランド・ライフル連隊で実務経験を積みます。

その後、世界を知ることが必要であるという父の考えから、フランス、イタリア、トルコ、イラン、インド、日本、アメリカなどの世界一周旅行に参加して、さらに幅広い見識を身につけました。初めての東洋の国々は印象的で、またアメリカではその近代文明に圧倒されたといえます。

国王は、その後イギリスでさらに、国の組織と地方行政、経済の仕組みを学び、1964年にサララに戻りました。帰国してみて、父には自分をすぐに国事に就ける考えがないことを知りました。国内旅行も許されず、何かのポストに就きたいという希望も無視され、ひたすらクルアーンやイスラーム法、オマーンの歴史を学ぶ幽閉の日々を強いられました。新聞を読むことも禁じられ、イギリス留学中もたびたびの手紙で故国の情報を伝えてくれた母が、イギリスの新聞「タイムズ」を服の下に隠してそっと運んでくれ、これによって世界の情勢を知り得たといえます。

すべての国民を監視下におき、とりつかれたように理不尽な規則を厳しく強いた父サイード国王の拘束的雰囲気や容認するのは困難で、ついにあの日、1970年7月23日に宮廷クーデターによって、ブーサイード朝直系の8代目、第14代国王に即位したのです。

数日後に初めてマスカットを訪れて国民の大歓迎を受けた若い国王の前途には、多くの困難が待ち受けていました。まずは、鎖国を続けてきた自国を国際的に認知させ、国内の諸問題に対応できる政府を立ち上げることが喫緊の課題でした。

理不尽な規則を廃止するとともに、国名を『マスカット・オマーン』から『オマーン』に変え、白、赤、緑の新しい国旗を制定しました。

その上で、国際問題については、欧米やアラブ諸国その他の承認を得、懸命な努力によって一年後の1971年にはアラブ連盟や国際連合に加盟することができました。

国内問題については、当時のオマーンには、学校は3校、病院も小さいものが一つ、舗装道路も10キロしかなく、どこの国とも定期航空便がなく、通信設備もマスカット以外は皆無でした。これらに対処する近代的な政府の体制も試行錯誤を繰り返しながら整えました。幸いだったのは、1964年にオマーンで石油が発見され、1967年からその生産が始まっていたことでした。

1963年にオマーン南部で起こった住民の小規模な反乱は、イエメン、中国、ソビエト連邦などの支援を受けたPFLQAG（アラビア湾占領地解放人民戦線）の下で組織化され、共産主義者陣営との戦いの様相を示していましたが、このドファール内戦もサンドハーストで培われた国王の軍事的な才能と政治力によって1975年12月に収束させることができました。

経済面では、1976年から5ヶ年計画を導入し、1995年には2020年までを見通した「オマーン・ビジョン・2020」を策定し、オマーン経済はその下で着実な進展を見せております。

その後急増した石油とLNG生産増による収入増を背景に、空港、テレビ局、発電所や淡水化プラント、近代的道路網などのインフラ整備、大規模工業地帯と世界最大級の港湾、通信設備や近代的なホテルも建設されました。

内政面でも、憲法に当たる国家基本法や数多くの近代的な法律や行政組織を整備し、国民の幅広い政治参加を求めて「オマーン議会」（二院制）を設置して、近代国家としての政治体制も整えました。

即位時3校しかなかった学校もいまや1300校を超え、大学等の高等教育機関も25校となっています。また、近代的な保健医療サービスも大きく拡充されています。国民生活も様変わりし、著しく向上しました。いまやオマーンは、平和と繁栄と政治的安定を謳歌しています。

アラビア半島の最後進国の近代国家への転換に向けて国王を駆り立て、努力を持続させた原動力はなんだったのでしょうか。

自国が一大海洋帝国であったことを知っていた国王がイギリスに行ってみると、「オマーンはどこにあるのか」とたびたび尋ねられて困惑し、場所を示すために地図を買ったといいます。アラビア半島以外ではオマーンという国がほとんど知られていないことを知りました。

帰国後のサララでの幽閉生活では、オマーンのかつての栄光と国には浮き沈みのあることを学び、オマーンの当時の停滞は一時的な現象にすぎないと確信したといいます。

また、過去に国を繁栄させたオマーンの君主たちは従来のやり方を踏襲せずに、改革によ

って国を発展させてきたことを学びました。とりわけ、国内外の問題を大胆に再構築したサイド・ビン・スルターン国王に感銘を受けたといいます。人々を王宮に集めて意見を聞き、慶弔時にはその国民を訪れたりする気遣いのあるサイド国王の人柄、また夢を持ちその実現への願望を持ち続け、それを実現したことにカブース国王は魅せられたといいます。

祖国再生を夢見て、40年間改革を進めてきたカブース国王の原動力は、イギリスでの屈辱感、歴史から学んだ確信が支えてきたものと私は考えています。

カブース国王の政治的な洞察力や先見性には定評があります。外交面では、カブース国王とイランとの協力関係の構築に倣ってエジプトのサダト大統領がイスラエルとキャンプ・デービッド合意にこぎつけたこと、イラン革命とソ連のアフガニスタン侵攻後に、いち早く米国と軍事的関係を強化したオマーンの事例にGCC諸国が結果的に追随したこと、イラクのクウェート侵攻後もイラクとの外交関係を継続したことなどがとくに知られています。そのため、世界の指導者たちが、カブース国王と意見交換をするためにしばしばオマーンを訪れています。

これらの洞察力や先見性は、何に由来しているのでしょうか。単なる思い付きではありません。サララでの幽閉時に集中したイスラームと歴史の勉強、その後の歴史、神学、哲学、政治、経済、軍事戦略等の幅広い分野にわたる不断の研鑽、また多くの人々との交流による豊富な経験などによる裏付けによって形成されたものと私は考えています。

ここで、カブース国王が毎年恒例としている『ミート・ザ・ピープル』という興味深い行事を紹介したいと思います。これは、国王自らが車を運転して国内を回り、地元の指導者たちと話し合い、人びとのニーズに耳を傾ける旅です。国王は、「国民とのこれらの集会は、私にとっても重要なものだ。わが国の伝統は、個々のオマーン人が国王と直接会えることである」と言われています。

オマーン在住中、私もこの『ミート・ザ・ピープル』の国王の行列に出会ったことがあります。ニズワからマスカットに帰る途中のことでしたが、ニズワを過ぎところで、国王の写真や歓迎の言葉を書いたボードを持った大勢の人々が道路脇を埋めていました。中には踊っている人もいました。

やがて、はるか先に歓声が上がり、その歓声が近づいてきます。周りは押すな押すなの大混雑となりました。目の前を白い房を両脇に垂らした四輪駆動車がゆっくりと通り過ぎました。国王でした。写真で拝見する通りの白いひげの国王がご自身で車を運転していました。国王の車に赤や白など色とりどりの花を投げかける人、国王の写真掲げる人、国旗を振る人、たいへんな歓迎ぶりでした。

その後2週間ほど経って私が働いていた商工省に一人の若者が訪ねてきました。用件を聞くと、『ミート・ザ・ピープル』の時に砂漠に宿泊していた国王に会い、自動車整備工場を始めたいと相談したところ、商工省と相談せよと言われたので来た」というのでした。「本当に国王と話をしたの」と訊くと、「2回した」というので、「オマーンでは誰でも国王に会えるのだ」と確信しました。

また、「町で夜ロングボディの車を見たら、国王かもしれないよ」と商工省の同僚から聞いていましたが、国王は興味のある場所には、夜陰にまぎれてお忍びで訪問されます。私自身も、お忍びで訪問された2つの事例を実際に聞いております。

これほど国民の中に入り、行動する国の指導者は稀であると思います。

21世紀を迎えるにあたってオマーンの将来をどう見ているかについて、カブース国王は「オマーンの未来は明るい。オマーンは強固な基盤を持って21世紀に入る。しかし、私たちは止まったままではいけない。一步踏み出しながら、同時に次の一步を考えていかなければならない」と語りました。

それから10年経った今年10月のオマーン議会での演説で、国王は次のように述べられました。

『我々が望んだ近代国家建設への道のりは、容易なことではなかった。大きな困難と障害の道であった。しかしながら、社会全般一男女を含めて一の勤勉な仕事ぶりと献身、それに神の助けとお導きに対する絶対的な確信によって困難を克服し、近代国家の建設はほぼ達成された』、『次世代がこの道を持続していけるように彼らを守り、保護することが重要である』と。

国王は、これまでの国の発展に満足し、その行方に確信を持ち、その成果を次世代へ継承することを呼び掛けています。

即位当初から国民の参加が国家の発展に不可欠だと考えてきた国王は、国民のさらなる参画を望んでいるように思います。アラビア半島諸国でオマーンほど女性が国家の運営に参加している国はありませんが、今年からオマーンは10月17日を『オマーン女性の日』と定め、国の発展への女性のいっそうの参加を呼び掛けていることも紹介しておきます。

日本では、カブース国王と言っても知っている人は多くはないかもしれませんが、この国王から学ぶものは実に多いと思います。

絶望の中でも夢を持ち、その実現への熱烈な願望を持ち続け、努力を惜しまずにそれらを実現した生き方は日本の若者たちにもぜひ学んでもらいたいと願っています。

また、歴史と伝統から創造的潜在力を引き出す政治的な叡智、絶えざる研鑽によって生まれるその先見性と洞察力、国民への融け込みなどは日本の政治家にぜひ知ってもらいたいと願っています。

国王は『国民が国家に依存している国々で起こっていることを考えてみて欲しい。そのような国は崩壊し、貧困と政情不安が広がっている』と言っていますが、この言葉は、我々日本国民みんなが噛みしめなければならない言葉だと感じております。

ご清聴ありがとうございました。」

#### 18-4. カブース国王崩御 - 世界中から集まる弔問客

私は2020年1月1日に、日本オマーンクラブ会員向けに「スルタン・カブース国王

の健康状態は安定」という題のオマーンニュースを配信した。

内容は、新年のあいさつを述べた後で、「昨31日、国王府はカブース国王の健康状態に関して『安定している。処方された治療プログラムを続けている』と発表しました。カブース国王は、国王に対する全国民の心からの思いや支持に対して謝意を示すとともに、オマーンと国民への神のご加護を願い、国の発展の歩みが目標を達成できるよう、かつ忠実な国民に進歩と繁栄を与えてくださるよう神に祈られました」というものだった。

それより前の2019年12月14日に私は、「カブース国王、ベルギーからご帰国」という題で以下のオマーンニュースを配信した。

「カブース国王は、ベルギーでの治療と検査を終えて、このほど帰国されました。国民は、祖国と自分たちを導き、鼓舞していただく国王への神のご加護とご長命を祈っています。国王は、12月7日（土）に検査のためにベルギーに出発されておられました」。

国王はその前の11月18日の第49回目のオマーン・ナショナル・デーには、サイド・ビン・スルターン海軍基地（マスカット市の西方108キロにある）での陸海軍や警察などの精鋭が参加して行われた軍事パレードにご臨席されていたので、私は、国王府の「国王の健康状態は安定」という発表を信じて疑わなかった。

2020年の1月9日になって駐オマーン元日本大使や元オマーン在住の日本人の友人から、「カブース国王が亡くなられたのではないかという噂がTwitter（現X）上で流れ始めている」、「公式発表はないが、遠藤さん、何か情報を得ていますか」というメールをもらった。

そこで、私はオマーン専門の日本人学者に「なにか聞いていませんか」との問い合わせをした。返ってきたのは、「たまたまオマーン人の友達とチャットをしていたので、それとなくカブース国王の近況はどうだとふって見たが、そのようなニュースが広まっている様子はない。年末に国王は元気だったし、つい先日も貧者に施しをされたというニュースを聞いたばかりです」と相手は言っていた。とはいえ、「ご病気でもあるのでありそうな話です」という答えだった。

その後、1月11日に国王府が「カブース国王崩御」について以下の声明を発表した。

「オマーン国民、アラブ諸国とイスラーム諸国と世界の国々のみなさまへ  
アッラーとその摂理への心からの信仰と大いなる悲しみで、しかしながら全能の神アッラーの思し召しへの十分の満足と絶対的服従の心で、イスラーム暦1441年ジュマダ・ル・ウーラー（5月）14日、西暦2020年1月10日（金）に亡くなられたカブース国王陛下に謹んで哀悼の意を表します」。また、国王府は、3日間の服喪と40日間の半旗の掲揚を発表した。

私には、1月1日に「国王の健康状態は安定」というオマーンニュースを流していただけにショックであった。

国王の継承者が誰になるのか。これについては、1996年に制定された国家基本法第5条で、「政治制度は王政で、王位はセイイド・トゥルキ・サイド・ビン・スルタンの男子

後継者に世襲される。ただし、王位継承者として選ばれる者はイスラーム教徒で、賢明、かつ健全な精神の持ち主であり、イスラーム教徒のオマーン人両親を持つ嫡出男子でなければならない」、第6条では、「王位が空位になった場合は、3日以内に王族会議が招集され、王位継承者を決定する。王族会議が王位継承者の選択について合意に達しない場合は、国王が王族会議宛の書簡で指名した次の国王を国防会議が任命する」とある。

カブース国王が偉大であっただけに国王崩御の場合の後継者の決定は「大変だ」、「もめるだろう」という見方が研究者・識者の中に多かった中で、私は「オマーンは大丈夫。そういうことにはならない」と見ていた。私の見方は当たった。

国家基本法第6条と同年の勅令に基づいて、まず国防会議が王族会議の招集を求め、その後開催された王族会議で「故国王の英知と思慮深いご遺志（指名）に従おう」という決定がなされた。そこで、国防会議が、王族会議メンバー、オマーン国会議長、最高裁判所裁判長、副裁判長の立ち合いの下で、故国王の書簡を開き、そこに書かれていたハイサム・ビン・ターリック・ビン・サイード遺産文化大臣が国王に指名された。

これを受けて、新国王は1月11日に、オマーン議会と国防会議のメンバーを前に即位の宣誓を行った。

宣誓後のスピーチで新国王は「カブース国王が国内生産や収入源を増大させるとともに、強固な法制度、頑強なインフラストラクチャーと社会経済制度を持つ近代国家を建設した偉大な国王であった」と称え、「国王の遺徳に報いるには、故国王のように賢明な方法で未来に向かって歩み続けることだ」と述べた。

「外交方針としては、故国王が敷かれた平和的共存、善隣、内政不干渉、相互主権尊重の原則を踏襲する。従来通り、紛争は平和的手段で解決する」と述べ、「地域的には、湾岸諸国首脳間の協力を従来通り推進する。アラブ全体としてはアラブ連盟を支持し、アラブ諸国首脳間と協力を維持する」、「国連のメンバーとしてその憲章を尊重し、メンバー国家とともに世界平和の達成と経済的な繁栄を目指してその役割を果たす。故国王がされたように、諸国間の友好と協力の原則や署名した憲章、協定、取り決めに順守する」とも述べられた。

スピーチの後に王族の方々、大臣、国王顧問、軍関係者、議員や市民などからの祝福を受けられ、国歌が演奏され21発の礼砲が放たれた。

一方、カブース国王の葬儀は、11日にマスカットのボシェール地区で数千人が参加して行われた。ハイサム新国王と王族に先導され、大臣、顧問、軍関係者、オマーン議員議会メンバー、重要な閣僚や要人、市民が葬儀に参列した。

葬列は、バラカ宮殿から葬儀が行われたグランドモスクへと進んだ。国王の御遺体は、国旗に覆われ、葬儀はグランド・マフティ（イスラーム教最高法学者）であるハリル導師によって執り行われた。すべての人が、国のために尽くした国王に報いがあるよう神に祈り、悲嘆にくれる市民たちはオマーン・ルネサンスを率いた国王に別れを告げた。

翌12日に、新国王は各国首脳たちからの弔問を受けられた。訪れたのは、クウェートの首長、カタールの首長、バーレーンの国王、ヨルダンの国王、イエメンの大統領、チュニジ

アの大統領、パレスチナの大統領、オランダの国王、ジブチの大統領、UAEの皇太子、イギリスの首相、イラクの大統領特使の副首相、イギリスのチャールズ皇太子、スーダンの主権評議会議員、フジャイラの首長、シャルジャの首長、トルコの大統領特使の副大統領、アルジェリアの首相、イランの外務大臣、前フランス大統領、イギリスの防衛大臣など。また、新国王は、国内の王族、大臣、顧問、次官、その他の政府高官、国家評議会および諮問評議会議員、シェイクや市民及び外国の外交団の弔問も受けられた。

13日には、アラム宮殿でサウジアラビアの国王、UAEの副大統領兼首相兼ドバイ首長、アジマンの首長、アル・ハイマ首長、ウンム・アル・カイワインの首長の弔問を受けられた。

14日には、新国王はアラム宮殿でスペインの国王、ソマリア共和国の大統領、日本の安倍晋三総理大臣の弔問を受けられ、弔問はイスラームの慣習に則って12日から14日の3日間で終了した。

実は、その後もハイサム新国王は、アラム宮殿でカタールの前首長夫人とUAEの前UAE大統領夫人の弔問も受けられた。

また、弔電もたくさん届いた。サウジアラビアの国王、イギリスのエリザベス女王、ロシアの大統領などからも弔電が届き、アメリカのトランプ大統領は、「カブース国王陛下の死は大変に悲しい。カブース国王はアメリカにとって真のパートナーであり、友人であった」との声明を発表した。さらに、「カブース国王陛下はオマーンに平和と繁栄をもたらした。アメリカの9人の大統領たちと仕事をしてきた」とも述べた。

天皇陛下からも新国王に宛てて弔電が届けられた。その中で、天皇陛下は心からの弔意を示し、新国王とオマーン国民にお悔やみの意を伝え、1994年のオマーン訪問に際してカブース国王と面談したこと、また温かい歓迎を受けたことを強調された。

さらに、国連の事務総長、中国の国家主席、フランスの大統領、韓国の大統領、イラクの首相、ネパールの首相、モルディブの大統領などなどからも弔電が届いた。カブース国王がいかにか世界から尊敬を集めていたかの証左となる弔問者と弔電の多さであった。

国連では、13日に半旗が掲げられ、14日には、カブース国王を追悼するために総会で1分間の黙祷が捧げられた。その後、31日には、カブース国王追悼の特別総会が開かれた。この席上で第74代国連総会議長（ナイジェリア国連常駐代表）は、「カブース国王は平和への仲裁者であり、国連創設の理念の実現に尽くした人」と述べ、出席者一同に1分間の黙祷を求めた。また「国王はオマーンの近代化・工業化に尽くされた。教育や環境、宗教的な寛容や平和への仲裁者としても優れた指導者であった。国連メンバーは国王の後に続こう」と語った。

グテーレス事務総長は、「カブース国王がオマーンを国連・アラブ連盟・湾岸協力会議（GCC）加入に導き、その指導力と献身によって国際社会でオマーンが活発で責任のあるメンバーとなるように働かれた。そのおかげでオマーンは地域の緊張状態に巻き込まれることはなかった。国王は平和、相互理解と共存のメッセージを広めたことで知られ、国内では、男女の教育レベルを大きく押し上げた。カブース国王の跡を継いだハイサム国王によって、

同じように地域や世界問題に対するオマーンの貢献が続くと思っている」と述べた。

トーゴ共和国国連常駐代表は、アフリカ諸国を代表してカブース国王が世界で象徴的な人物であったこと、国民の幸福のために国の近代化に尽くしたことを称賛した。

また、ブルネイ国連常駐代表（女性）は、アジア・太平洋グループを代表して、カブース国王がその叡智と先見性をもって多くの困難を乗り越え、オマーン近代化を推進したと称えた。

一方、トランプ米大統領の中東和平プランを討議するためにカイロに集まったアラブ連盟の外相たちも席上カブース国王のために黙祷を捧げた。

16日には、ハイサム新国王に、世界の指導者たちから即位の祝電が続々と届いた。サウジアラビアの国王、モロッコの国王、エジプトの大統領などのアラブ諸国の指導者、習近平国家主席、プーチン大統領などなど世界の指導者たちから、また国内でも王族や大臣、軍司令官、王立警察、国家及び諮問評議会議長などから祝電を受け取られた。

アメリカのトランプ大統領からは16日の夜に電話があり、「カブース国王の崩御に対して深い悲しみの念を伝え、オマーンが新国王の下でさらなる発展と繁栄を続け、米国との友好関係も増進するよう祈念する」と話した。いまハイサム新国王は、カブース国王の継承者として、亡き国王の方針に沿ってオマーンを導いておられる。

#### 18-5. 日本国内でのカブース国王追悼 - 雑誌と新聞の追悼記事

崩御を知った私は、日本オマーンクラブ会長と連絡を取り、11日に会長名で駐日本オマーン大使宛に弔電を送り、クラブのHPに掲載してクラブ会員に告知をした。

「オマーン国王が崩御されました」という見出しで、「オマーン・スルタン国カブース国王が昨日1月10日に崩御されました。カブース国王はこの半世紀の間、オマーンの発展に限りなく尽くされました。国王陛下の崩御は世界のリーダー、とくに中東での平和リーダーとして惜しまれます。日本オマーンクラブは、オマーン国民の皆様に謹んで深く哀悼の意を表します」とした。また、個人的には、もっとも親しいオマーン人の要人2人に弔電を送った。

12日夜に自宅で、「週刊新潮」の記者から1時間強に亘ってカブース国王について電話取材を受けた。その結果が2020年1月16日発売の同誌1月23日号「墓碑銘」欄に1ページに亘って掲載された。見出しは、「オマーンを治めて50年、カブース国王、仲介力と親日」。驚いたことに、私の名前がもっとも多い3ヶ所に引用されていた。

13日になって、駐日オマーン大使館から、「大使館にて1月14日より3日間、記帳台を設ける。時間は、10時から16時。なお、アルブサイディ大使と外交官は、3日間とも10時から12時、14時から16時に弔問を受ける。個別の面会を希望する際には、記帳台近くのスタッフに申し付けるように」という連絡が入った。

私は、初日の14日に伺い、記帳を済ませ、その後2階の大使応接室で大使に直接、お悔やみを伝えた。



同日、朝日新聞社からメールが入った。それには、「今回のオマーン・カブース国王逝去を悼みまたハイサム新国王誕生を祝し、朝日新聞では1月末の追悼記事の掲載を計画している。参加を検討願いたい。他には日本・オマーン協会名誉会長と駐日オマーン大使にも依頼中」との内容だった。「日本・オマーン協会名誉会長は安倍晋三総理大臣。私には荷が重いな」とは思ったが、これを引き受けた。

追悼記事は、2020（令和2）年1月31日付けの朝日新聞の18面にフルページで掲載された。「オマーン・スルタン国 スルタン・カブース・ビン・サイード・ビン・タイムール国王陛下の崩御を悼み、謹んで哀悼の意を表します」という大きな見出しで、カブース国王、駐日オマーン大使と私の写真が載り、私の文章が4分の1ほどの紙面を占めて載せられた。以下に、その全文を掲げる。

「カブース・ビン・サイード・ビン・タイムール国王陛下崩御の悲報に接し、新国王陛下とオマーン国民の皆様にご心より哀悼の意を表します。

カブース国王陛下が弱冠29歳にして大いなる勇気をもって即位された当時のオマーンは、学校は3校、舗装道路も10キロしかなく、対外的には鎖国政策をとり、往時のオマーン帝国の面影のかけらさえない貧しい国でした。

それから50年経ってオマーンは近代的な法や諸制度を整えた近代国家に見事に変貌しました。平和を希求するその外交は世界中で高く評価されています。

これはひとえに、ひたすら国民の幸せを願われて、深い叡智、優れた先見性と洞察力、政治的な巧みさを兼ね備えたカブース国王陛下の賢明な指導力があればこそのことでした。

即位後にカブース国王陛下の路線の踏襲を宣誓されたハイサム・ビン・ターリク・ビン・タイムール新国王陛下の指導の下で「オマーン・ルネサンス」の力強い歩みがさらに進み、オマーンとオマーン国民が繁栄することを心より祈念しております。」

## 18-6. カブース国王の喪が明けて - 現地紙の報道とハイサム国王の演説

カブース国王の崩御でオマーンの人々が悲痛の日々を送ってきた40日間の服喪期間が2月19日で終わり、半旗だったオマーンの国旗が故国王が望むように誇りと熱意の中で再び高く掲げられた。

喪が明けるや現地紙は、カブース国王の遺徳と今後への期待を以下のように伝えた。

「忠実なオマーン国民や世界中のオマーンを愛する人々は、故国王の崩御に神の恩寵を感じ、最善の後任者であるハイサム新国王の即位を慶んでいる。また、新国王が『故国王の路線を踏襲する』と表明したことを支持している」

「その偉業の故に、カブース国王の記憶は偉大な支配者として深くオマーン国民の心に刻み込まれて残るだろう」

「国内での業績に加えて、戦争や紛争が絶えない地域にあって安全、安定、平和の維持はとくに顕著な偉業だった。地域や世界も故国王の先見力や判断力によって大きく救われて

きた。世界中の人々が故国王に敬意を表し、オマーンも尊敬と信頼を勝ち得て来たゆえんでもある」

「これからはオマーン国民、とくに若い世代の能力を結集して、収入源の多様化や来年から始まるビジョン2040の履行も含む国家目標の達成や国家のこれまでの成果の維持に邁進することが望まれる」

ハイサム国王は2月23日に、1月の就任演説に次いで演説をされた。その概要は以下の通り。

「オマーンを近代国家に作り変え、オマーン・ルネサンスを推し進めたカブース国王が天国で安らかに眠られるよう神に祈りを捧げる」

「故カブース国王の業績は、オマーンへの忠誠の意義を知り、その価値観やこれまでの成果さらには国家の安全と安定を維持し、これからの国の発展や繁栄に貢献する次世代のオマーン人たちの原動力となるだろう」

「GCC諸国やアラブ諸国、他の友好国、国際機関などから故国王に同じ思いを寄せられたことに感謝する」

「オマーンは世界でも影響力のある文化国家として知られており、平和の旗を掲げてきた。この路線は踏襲する」

「オマーンは、この50年間故国王の指導の下でのオマーン国民の努力によって近代国家に生まれ変わった。国民すべてに、オマーン・ルネサンスの成果を維持するように求める」

「国にとっての最優先事項は教育体系の改善である。研究と革新を促す環境を作ることが必要であり、次の発展に資するために子供たちが必要な能力をつけるには教育が基礎となるからである」

「われわれはいま発展と国造りの重要な岐路に立っている。われわれは「オマーン・ビジョン2040」を策定し、経済、社会、文化面での目標を立案している」

「将来の目標を達成するために、国の行政の仕組の改革を行う。それには、法制度、作業プログラムやメカニズムの近代化、作業価値の増大、手続きや履行の管理、公正性、ビジョンとの整合性の説明責任、整備が必要となる。また、財務面では債務を減少し収入を増加させる最適なやり方で配分していかなければならない」

「政府は、中小企業、企業家精神、人工知能や先端技術なども含む重要な分野で若者をトレーニングするだけでなく、その進展も追い求めて行く」

「包括的な国家的な雇用の枠組みを支え、発展させる。このためには、政府・民間部門を問わず、雇用環境の改善が必要となる」

「さらに、政府部門での雇用システムの見直し、改善が必要である。それには、国家資源・専門知識・能力の最適利用と多くの就業希望者を吸収するための政府の新しい雇用システムと政策の導入が必要となる」

「国造りと発展は、国民全体の責務である。オマーンとその文化は先人たちの犠牲の上で

作られてきた。望むべき発展を手に入れるには、これを確固たるものにし守り続けて行くことをわれわれは決意すべきである。われわれは法治国家で、自由・無差別・機会均等、個人の公正と尊厳に基づく国、国家基本法に基づいて表現の自由が認められている国に住んでいる。国の現在と未来を形作るうえで、国民の参画は国家運営の基本である。私はこの国の基本を守り続けることを繰り返しておきたい」

「私は、この誇らしいルネサンスを続けるためにオマーンとオマーン国民に生命を捧げることを誓うが、皆にもそのことを神に誓うことを求めたい。私は絶対的に、皆の能力を信じている」

「私はわが祖国とその利益を守る責務を果たしてくれている軍関係者に深甚の感謝をしたい。また、経済活動を支え、この平穏な国の国民と住民に必要なサービスを提供している生産部門とサービス部門を褒め称えたい。国家の発展に素晴らしい役割を果たしている民間部門も称えたい」

ハイサム新国王が即位してからおよそ1ヶ月後の2月24日に、オマーン国内で初めてコロナ感染者が見つかり、そのコロナ渦での世界的な需要減によって石油価格が下落するという困難な事態が待ち受けていた。

新国王は、各官庁の予算を10%、治安・軍隊などの予算を5%削減するなどの思い切った歳出カット、内閣の大幅な改組と大臣人事を断行し、またコロナに対しては自らも主宰された新型コロナ対策最高委員会を中心に巧みに対応した。

コロナ禍からの世界経済の回復とOPECプラスの石油減産による需給のひっ迫、さらには2022年2月下旬のロシアのウクライナ侵攻により原油価格は回復基調から高騰に転じた。オマーンでは債務が減少し、信用格付けも向上。経済発展のための投資に資金を投入できるようになり、経済の先行きには明るさが増している。最近では、非石油製品の生産部門の拡大などによって経済の多角化をすすめると同時に、教育、医療、社会福祉への投資も拡大している。

ハイサム国王の賢明な指導の下、オマーンの前途は明るい。